

島村抱月についての新事実

——その東京専門学校政治科入学について——

川 副 國 基

島村抱月は明治二十四年（一八九一）、数え年二十一歳で東京専門学校の文学科に第二回生として入学して居り、それ以後の彼の事蹟は一応明かなものになっている。しかし、文学科入学以前の抱月の経歴については、辿りにくいところが甚だ多い。

のちの島村抱月即ち佐々山滝太郎が、窮迫した家庭の事情から、郷里近くの浜田の町へ出て、そこで苦学生同様な不遇な少年時代を過したと、浜田の裁判所に雇書記としてつとめていた時、検事の島村文耕なる人にその資質をみとめられて学費給与の約束で二十三年二月遊学のため上京したこと、翌二十四年島村家の養子となつたことなどのことは大体知られているけれども、その頃のことは抱月自身詳しいことを書きのこしていない。断片的な、あるいは大まかな回想などがあるだけである。恐らくは抱月にとって追憶しても、愉快な思い出ではなかったからであらうと思われる。

特に、二十三年二月、数え年二十歳で上京してから、翌二十四年十月東京専門学校文学科に入学するまでの一ケ

年半あまりの、抱月の志向、動向を決定する最も興味深い期間のことが、抱月自身によっても、またその身邊の人たちによっても殆ど語られていないことは残念なことである。抱月について最も詳しく思ったと思われる門下の逸材相馬御風の手になる「抱月島村滝太郎先生小伝」(抱月全集第一巻の巻頭に収めてあるが、これは御風生涯の文章のなかでも、あるいは最も力のこもったものではないかと私は考えている)のなかでも

先生の東京に出づるや、初め東京物理学校、日本英学院、私立商業学校等に、英、数、理科等を学びたりしが、明治二十四年十月つひに東京専門学校文学部に入り、同二十七年七月其業を卒ふるに至れり。但し上京の当初に於て先生の目的としたりしところ、又は其後如何なる内外の経過を辿りて特に東京専門学校の文学部を選んで入学するに至りしか等の事に関しては、今日之れを知るによしなきを遺憾とす云云

と記しているにとどまる。しかし、「明治二十四年十月つひに東京専門学校文学部に入り」の「つひに」という言葉や「但し上京の当初に於て先生の目的としたりしところ、又は其後如何なる内外の経過を辿りて特に東京専門学校の文学部を選んで入学するに至りしか等の事に関しては、今日これを知るによしなきを遺憾とす」という文章は、長らく私にいろいろな思いを抱かせてきたところであった。御風も、恩師抱月の上京当初の目的が実は那邊にあったものであるか、又その当初の目的志向がいかなる曲折を経て結局東京専門学校の文学部入学ということに落ちついたものであるかということに関心があったことがこの文章からは窺われるとともに、また、しかしながらこのことに関しては当の抱月自身が生前あえて深く語ろうとせず、御風自らも亦あえて問いたすこともなかったうちに抱月との思いがけぬ永別に遭ったという憾みの気持を十分に汲みとることが出来るのである。

私は近著「島村抱月」(昭和廿八年四月刊行)のなかの「遺囑二家と島村抱月」という章では次のように書いて

た。

十五里ばかりを隔ててはいるが鷗外も抱月も同じ石見国の産である。十五、六歳頃から廿歳上京する頃迄の抱月は、浜田町の裁判所に給仕勤めのようなことをしていたのだが、その裁判所に嘗て鷗外と同じ時期に東京大学で学んだという人がいて抱月はこの人に大いに文学熱を鼓吹されたという。そして上京した抱月はその人の紹介で先ず鷗外を訪ね上級学校入学のことを相談したと伝えられる。鷗外は時に帰朝して既に二年余、本職は軍医学校二等軍医正教官心得であり、文学上の仕事としては、前年の廿一年に発刊した「柵草紙」上に翻譯、評論數種を掲げ、この廿三年に入ってから名品「舞姫」を発表している。浜田時代の抱月は一時医師志願だったともいうが、この時の抱月は紹介者の人柄から考えても「文学者」鷗外をたずねたことと思われる。この時鷗外は抱月に東京大学への入学をすすめたという。^註そのすすめに抱月が何故従わなかったのか分らない。が、このあたり、東京大学の政治科を出ても官途に就かず文学の道に進んだ逍遙と、官吏の登竜門たる東京大学に進まないで一私学の文学科を選んだ抱月とに何かしら共通なデモクラチックなものが感ぜられるのである。政治熱に浮かされた青年の多い当時、まだ世間的評価も高からぬ文学への道を進んだということに抱月の一つの傾向が既に早く察せられるのである云云

〔註〕「島村氏がまだ佐々山の旧姓を名乗って郷国の郡役所だか裁判所だかに勤めてをられた少年の頃、同じ石見の人で森氏と同窓で大学の一年までとか一緒だったといふ人が、病気で途中で学問を止めて島村氏と同じ役所に勤めてゐた。島村氏に文学熱を鼓吹したのは其人で、東京へ出て早稲田に入る前に森氏に逢ひ、学校の選択について意見を叩いたのも其人の紹介に依つてであつた。其時森氏は帝大の方を勧めたが島村氏は或事情から結局早稲田に入る事になった」

（「中央公論」明治四十四年七月号、諸家の島村抱月論のなかの中村星湖の文章）

ところが最近、この、問題を含む抱月の上京から東京専門学校文科入学迄の期間に一つのまことに興味ある事実が発見された。それはひとえに目下御休養中の柳田泉教授から稲垣達郎教授を通じて私に戴いた御教示によるのである。即ち柳田教授から「かつて自分が早稲田大学の旧い学籍簿を検した折、たしかに佐々山（抱月の旧姓）滝太郎が東京専門学校政治科へ一度入学している記録を見たことがある」というお知らせがあった。そこで私は早速、稲垣教授とともに早稲田大学の学籍課を煩わして仔細に点検した結果、柳田教授の御記憶にあやまりがなかったことを確認した。燈台下暗しというが、私はおのれの迂濶さに深く恥じ入るとともに、柳田教授の博覽強記に今更のごとく敬服したのであった。

即ち、当時の学籍簿には次のような記録があった。

府 県	入学年月	退転除其他	得業年度	学 科 別	姓 名	改姓改名
島 根	二三・三・三一			政	佐々山滝太郎	

この記録の「佐々山滝太郎」は、出身府県が「島根」とあるところからも、改姓前の抱月のことであることに疑いはない。二十三年二月島根県の郷里から上京した抱月は、上京後いくばくもない三月三十一日付で東京専門学校政治科（邦語）に入学したという事実がここに明かにされたわけである。

ところで、二十三年三月三十一日に政治科に入学した抱月は、文学科へ移る二十四年十月まで、そのままずっとその政治科に籍をおいたままであったのであろうか、それとも途中で退学したのであろうかという疑問が、続いておこるのである。が、そのことについては更に次のような記録が発見された。明治二十二年五月付の「〔学生名簿〕第二ノ二、ムース、二冊ノ内」というものに

邦語政治科（退学） 四月

島根県磐見国那賀郡久佐村七十九番地

一平長男 平民 明治四年一月

(23) 佐々山滝太郎

とあるのである。この「佐々山滝太郎」が抱月その人のことであることは、本籍地からも生年月からも、前の場合よりも更に明白であるが、こののちの抱月佐々山滝太郎が邦語政治科を四月に退学したという記録である。

(23) というのは「二十三年度入学生」という意味と思われるが、退学の月の「四月」というのは、二十三年の四月のことであるか、二十四年の四月のことであるか、この記録だけでは明かでない。

が、私はこの四月を明治二十三年の四月というふうに推定する。即ち佐々山滝太郎は、二十三年三月末日に東京専門学校の政治科に入学し、在籍一ヶ月、四月にはもはや退学したものと考えるのである。

その理由はいくつかあるのであるが、先ず文学科学生時代の同期生であった中島半次郎が「早稲田文学」の抱月追悼号（大正七年十二月）のなかで「君（抱月）が学校に入るまでには、別に纏った教育を受けたことはなかった様であるが、それが常に優等の成績を示したのは云々」と同期生としての感想を書いていることである。ここで「学

校」とはいふまでもなく東京専門学校のことであるが、政治科ならぬ文学科同期生の中島半次郎が「君が学校に入るまでには」と書いたのは、勿論二十三年三月末の政治科入学までをさすのではなく、二十四年十月の文学科同期生としての入学までを意味していると考えられる。彼が抱月の二十三年三月末の政治科入学を全く知らないのか、或いは全く無視したふうに書いていることは、「学生名簿」の記録の「四月」が二十三年四月のことであることを示すものではあるまいか。いまもしそれが二十四年「四月」のことであつて、抱月が二十三年三月末から二十四年四月までの一ケ年もの間を政治科に学んでいたことがあるのであつたら、親友中島ともあるう者が、文学科入学前の抱月の学歴について「学校に入るまでには、別に纏つた教育を受けたことはなかつた様であるが」などとは決して書かなかつたであらうと思われる。

次には同じ抱月追悼号のなかで、これも文学科同期生の後藤宙外が「何かの機会に同君（抱月をさす）直接の話であつたが、まだ早稲田に入学せぬ前、神田の某私立学校に通つてゐる頃のこと、学資が一時全く杜絶して如何にもする道が尽きはて、餓死の恥辱を受くるよりはと抱月君は自殺しようと思ひ、或夜はく〜と下宿を出て、神田のお茶の水の断崖から川に投身しようと企てた事があつたといふ」と書いてゐることである。「早稲田に入学せぬ前、神田の某私立学校に通つてゐる頃」といへば、抱月の場合、二十三年二月上京してから三月末政治科に入学するまでの間と、その政治科を退学してから二十四年十月文学科に入学するまでの間と二つの時期が考えられるわけであるが、宙外が前者の場合をさして「早稲田に入学せぬ前」と書いたとは考えられない。島村文耕の援助の約束を得て上京したばかりの時に、俄かに餓死に追込まれる程の経済的窮迫が起つたとは思われなかつた、また、御風が小伝のなかに、この神田の某私立学校をも含めて書いたと思われる「先生の東京に出づるや、初め東京物理学

校、日本英学院、私立商業学校等に、英、数、理科を学びたりしが」という、学力補充、あるいは受験準備のためと思われる数個の学校遍歴が、僅かこの一ヶ月あまりの間に行われたとすることも首肯しがたいことであるからである。そこでこの宙外の「早稲田に入学せぬ前」という文章も、二十三年三月の政治科入学のことは全く問題にしないで、二十四年十月の文学科入学以前ということをやったものと考えられる。それにしても、それが二十三年「四月」以後のことか、または二十四年「四月」以後のことか、この文章では判然としないことになるのであるが、前記数校の遍歴ということから、これを二十三年「四月」以後の一ヶ年半近くの間というふうに考えたい。これ位の期間の彷徨があつてはじめて、御風の小伝の「つひに東京専門学校文学部に入り」の「つひに」という言葉も生きて来るように感じられる。即ち餓死的窮迫も、各種学校での勉強も、二十四年四月政治科退学以後ではなく二十三年四月政治科退学以後と考えた方が諒解し易いように思うのである。

〔註〕島村文耕からの学資の杜絶は養子問題がもつたことが原因であつたことを、のちに引用する実弟佐々山雅一の「早稲田文学」抱月追悼号中の談話から知ることが出来るのであるが、抱月の島村家への正式入籍は二十四年六月十三日である。それ以後の抱月には餓死的窮迫という程の窮迫は訪れなかったと考えてよからう。

なおまた二人の文学科同期生が抱月の政治科入学の前歴に期せずして全く無関心な態度の文章を書いているということから考えられることは、抱月自らがこの厳たる事実を日頃、殆ど口にもせず、筆にもしなかったということに起因するものと思われる。抱月がもし口にもし筆にもしたことがあるとすれば、この事実を御風のような親近な門下生がその「小伝」から逸してしまうこともなかったであろうし、われわれも亦これを新事実として今頃驚くこともなかったであろう。抱月がこの事実を口にも筆にもするところがなかったということは、抱月がこのことを口

にも筆にもするに足りないことと考えたということ、即ち抱月がこのことを重んじていなかった、無視していたということと考えてよからう。政治科入学が無視にしか働かないということは、その政治科入学が形式だけの入学、入学即退学、即ち三月入学四月退学、ということであつたと考えてよいのではあるまいか。政治科へ入学したということは恥ずべきことでもなければ隠すべきことでもない。もしかりに、翌年の四月までの一ヶ年間を政治科に在学していたとすれば、それは学問修業上の一つの経歴にもなることであるから、抱月も生涯そのことに全く觸れないでいた筈もないと思われるし、また当時の政治科の同期生だつたという人が一人位はあらわれてもいいと考えられるのだが、そうしたけわいも全くない。

以上のような理由から、ほかになにかの事実があらわれない限り、私は抱月のこの政治科退学の「四月」を、二十三年の四月だと推定するのである。

次に、抱月のこの、二十三年三月東京専門学校の政治科入学、同年四月同政治科退学という新事実を、抱月の境遇や志向や性向といったものと関連させて考察してみたい。

はじめこの新事実にふれた時、私は自分の耳と目を疑ふ気持であつた。抱月の資質は書齋人のそれであつて、「政治科」的なそれではないからである。洋行の時、偶然に仏国公使の本野氏と同船したこと、抱月が帰朝後政界にも活躍するのではないかと噂する人があつたということや、「我が党」意識が強くて帰朝後は早稲田の文科を中心文壇に集团的勢力をつくることに努めたといわれることや、また文部省の文藝委員として最もよく発言し活動したということやを聞いても、抱月を政治的だとする気持は全く湧いて来ない。

そこで、明治十年代から二十年代のはじめにかけて熾烈だったわが国一般の政治熱と関連させ、一時は抱月も政治熱に浮かされたのかと二葉亭や透谷や独歩のこととも考え合わせて見た。西南の役後に澎湃と起って来た自由民権運動、それによって下された国会開設の大詔、ひきつづく政党の結成、自由党と改進黨の対立、これらに刺激されて、行動的な、実践的な青年たちが、文学よりも政治の方を直接的だとし、男子一生の仕事と思いこんだ気持は理解出来る。二葉亭も透谷も独歩も政治と文学、行動と文学との間に身を処することに苦悶した人々であった。そのなかでも、特に透谷と独歩の二人は、改進黨の大隈の學校たる東京専門学校^註の英語科と政治科——その頃はまた文学科は開設されていなかった——との間を転々した青春の彷徨者であった。

しかし抱月の場合は、この人々の場合とちがうのである。二葉亭や透谷や独歩には、たしかに彼等が政治に大きな関心をもち、また政治的行動にふれたという事蹟もある。抱月にはそれらが全くないのである。前にもひいた実弟雅一の回想（「早稲田文学」抱月追悼号）のなかには、少年時代浜田町の病院の薬局生をしていた頃の抱月は「当人もまた医者になる考をその頃は持つてゐた」のであったが、やがてその地の裁判所に給仕となり雇となつてからは、これも前に註した中村星湖の文章（「中央公論」の諸家の抱月論のうち）によれば、その裁判所につとめていたかつての鷗外の学友から「文学熱を鼓吹」されて来たのであった。上京前の抱月に医者か、文学者かという迷いがあったことは考えられるにしても、政治家志望といった線は抱月その人からのものとしては浮んで来ないのである。

〔註〕北村透谷は明治十六年九月東京専門学校^註の政治科に入り、十八年九月英語科へ再入学している。国木田独歩は明治二十一年五月東京専門学校の英語普通科に入り、同年九月退学、二十二年九月改めて英語政治科に再入学、二十四年三月またそこを退学している。

そこでこれは憶測であるが、この抱月の非資質的な、形式的な政治科入学ということは、のちの養父たる、当時の物質的援助者検事島村文耕の、半ば強制的な希望ではなかったろうかと考えられるのである。

文耕はもと伊豫の人で太田姓であった。神奈川県都筑郡都田村に巡査奉職中その島村タツ方に入夫、島村姓を冒し、のち検事になって浜田裁判所に勤めていたのであったが、この人の経歴からは、一種の立身出世型、苦学力行型といったものが感ぜられて来る。

抱月上京の前年二十二年には帝国憲法が發布されたが、上京の年である二十三年は、十年前からの政府の公約であるところの衆議院議員の選挙と、それにもとづく第一回の議会の召集とが行われる年であった。条約改正の問題もあってこの前後、世間は政治に一方ならぬ関心を寄せていた。特にこの第一回の選挙とそれにつづく議会の召集ということは、とにかく形の上だけではあるが、はじめてわが国の一般人に政治が依託されたことであった。島村文耕のような人が、自分のふところから学資の給与を約した、部下の苦学生的秀才に、こうした時期に政治家大限のたてた学校の政治科を選ばせたということは十分に考えられることのように思う。

〔註〕選挙資格は二十五歳以上の男子であつてその居住する府県内において一年以上（所得税については三年以上）直接国税十五円以上を納めていることを要した。従つて全国（北海道・沖縄・小笠原を除く）人口三千九百三十八万二千二百人のうち、有権者数は四十五万三千六百六十五人で、全人口に対する有権者の割合は一・二四パーセントにしか当っていない。しかし選出された議員総数三百名のうち、百九名の士族出身者に対し、平民出身者は百九十一名もあった。（当時の内務省県治局長末松謙澄の調査にもとづいた岡義武「近代日本の形成」のなかの文章による）

そこでこれも憶測であるが、抱月はとにかく、学費給与者への義理を果すために上京後、東京専門学校の政治科

へ一応かりに籍だけをおいたのではなからうか。

抱月が上京のはじめから、郷里の先輩鷗外を進学上のたよりにしていたということは、既に註した中村星湖の文章からも十分に考えられるところである。抱月は大きな期待をもって鷗外をたずねたに違いない。そこには日頃の抱月が、そのいずれにしようかと迷っている医学と文学との二方面を見事にその身一つにかね備えた人がいたのである。同国人としての親しみのほかに、資質的に相通うところあるこの先輩に接して抱月は力強い思いをしたことと思われる。その折の鷗外が、抱月に東京大学への進学をすすめたということも鷗外らしいこととしてうなずけるのである。しかし抱月は心ならずも東京専門学校の政治科に籍をおいた。

はじめ雇時代の抱月に対して検事の島村文耕は、再三養子にしたいと申出て抱月の父を迷わせていたのであったが、「兄の遊学の志の強いのを見て島村氏が、学費を出してやるが東京へ出してやつてはどうかといふので、当人は無論のこと、父も倅の心を考へて言はれるままに学費を出して貰ふことに決めて、兄は上京することに定まつた」(「早稲田文学」抱月追悼号の実弟雅一の回想談)のであった。その抱月がいよいよ政治科に入つたとなると、恐らく島村文耕からは抱月の父に向つて正式に抱月を島村家に入籍させたいということがうるさく交渉されて来たに違いない。島村文耕という人については、後藤宙外がその著「明治文壇回顧録」のなかに抱月の語った言葉として「義侠心の強い人で一旦感激すると他の急を救ふといふ氣風であつたが、一面には自分の氣に食はぬ事があるとその反動もひどく怒れば随分思ひ切つたこともしかねぬ人であつた」と書いているが、抱月の父も亦、長男で秀才の抱月を簡単に手ばなすことを惜しんだために、そのトラブルは、忽ち学費の杜絶となつて東京の抱月の上へはね返つて来たものと思われる。実弟雅一の語る、抱月の上京後「島村家からは再三兄を養子に貰ひたいと云ふ話が出て父が

どうも承知をしないために或る時などは一寸学資が杜絶えた事などがあつて兄もその時は大分弱つたとのことであつた」という「早稲田文学」抱月追悼号中の話は、抱月上京後の島村文耕の養子問題への熱心さと、またさきにとりあげた抱月の餓死的窮迫の事情とをよく説明しているものといえよう。養子問題の解決は、前に註したように翌二十四年の六月、抱月の島村家への正式入籍によって漸くもたらされるのであるから、この間一年有余、抱月はしばしば学費杜絶の危機にさらされたことと考へねばならない。抱月が時折鷗外の家をたずねて、鷗外の母堂から小遣いを貰っていたらしいところがあることを、これも柳田教授のお話として稲垣教授が伝えて下さっているが、そうしたこともあるいはこの間のことかと考えられる。というのは、抱月が、学費の杜絶を予想しながらも、政治科を一ヶ月で退学して、改めて物理学校や商業学校や英学院で、数学や理科や英語を学ぶ決心をしたということは、抱月が自らの資質を自らの方向に伸ばそうとする自らの決意であつたとは思われるが、そこにはなんとなしに先輩鷗外の強い示唆があつたようにも感ぜられるからである。

数学や理科や英語は独学では学びにくい学科である。過去に正則な学び方をして来なかつた抱月が、これらの学科に特に力を入れて正規な勉強をはじめたことは、改めてまた他の学科か他の学校かへ移ろうとする意図からであつたと思われる。理科と数学を特に勉強の目標のなかに入れていたことは、医学志望の気持が強かつたからかもしれない。抱月は鷗外に似て、冷たい科学者としての資質もあり、また情感豊かな文学者としての素質にも恵まれていた。だがしばらくの間は、医学とも文学とも、いまだ志は決しかねていたようである。即ち、この二十三年の秋九月、東京専門学校には、はじめて逍遙主宰の文学科がおかれることになり、金子馬治^{註1}などは進んで他学科からこの文学科に移っているのであるが、抱月はこの文学科にこの年第一期生としての入学はしていない。志望がいまだ

さだまらなかつたのか、学資の問題があつたのか、或いはその両方であつたせいかと考えられる。かくして翌二十四年六月養子入籍まで、いつ杜絶するか分からぬ学費^{註2}の上の不安は続き、同じく翌二十四年秋文学科入学まで志向の決定のための精神彷徨が続いたと思われる。

〔註1〕 のちの評論家、哲学者金子筑水のこと。文学科第一期生である。

〔註2〕 はじめ上京の時、島村家からは月五円の学費給与の約束であつたと伝えられている。抱月上京の明治二十二年二月の米価は円につき三等米は一斗五升二合であつた。

抱月の人柄は寂しさ、暗さ、憂鬱さというところにその特徴があつたが、それがまた、悲涼の世界を扱うこと多かったその創作や、観照主義の文学論や、荒涼とした宿命的人生観と深く結びついていることはいうまでもない。この人柄は先天的なものであつたろうが、少年時代の郷里での長い不遇な生活と、それにひきつづいたこの上京後の逆境とが、またその後天的な形成にあずかつて力があつたことも疑えない。個我にめざめた青年抱月が、義理や人情や餓死寸前の経済的窮乏のなかにあつて、ひたすらにおのれのうちなる独自なものをうちだして行こうとした苦悶、その苦悶が、本来的な抱月の寂寥とした人柄や荒涼とした人生観を更に色濃いものとする事になったと思われる。

なお文学科入学後の抱月も、餓死的窮乏にこそ追込まれなかつたが、相変らず貧書生であつたことは、前にあげた同期生中島半次郎や宙外の回想のなかに繰返して述べてあるが、抱月自らも「序に代へて人生観上の自然主義を論ず」（明治四十二年）のなかで「十一、一二歳の頃から既に父母の手を離れて、専門教育に入るまでの間、凡て自ら世波と闘はざるを得ない境遇に居て、それから学窓の三、四年が思ひ切つた貧書生、学窓を出てからが生活難と

世路難といふ順序であるから切に人生を想ふ機縁のない生涯でもない」という風に書いている。

抱月に政治科入学という新事実があらわれても、そのことから、透谷や独歩の場合のように、当時の抱月の政治的関心、政治的趣向といったもの、即ち抱月の場合の政治か文学かといった問題は、ことごとしくひき出されては来ないように思われる。しかし、この事実があらわれたが故に、抱月の鬱悒な性格を更に色づけることになったと思われる上京後の深刻な物心両面の懊悩苦悶や、志望決定までの憂鬱に満ちた精神彷徨や、またそうしたもののちに行われた文学科入学ということが、いかに慎重且つ決意的になされたものであったかということが、いよいよ明かにされるに至ったと考える。(一九五三・七・二〇)